

前回までのあらすじ

オオミヤ・シテイに現れた巨大な機獣により無政府状態となった東方大陸。国際問題となる事を覚悟で送り込まれた暗黒大陸の〈機獣少女〉達は、しかし威力偵察の任を果たす事なく散っていく。活動を停止していた機獣が動き出し、不可思議な『輪』を更地となった地面より出現させ、荷電粒子砲の増幅器兼偏向レンズとして利用した結果だ。

崩壊したオオミヤ・シテイの地下に身を潜めていたロゼット達は、その光景を断片的にだが目撃。上昇する『輪』が二十時間後には衛星軌道に到達し、惑星全域が機獣の射程範囲に入る事を知る。

一方、エイミス教の教会に身を寄せていたツバキは、サクヤヒメとの戦闘で消息不明となっていた〈機獣少女〉——アヤカ・シユバイツァーと再会する。意識を取り戻したアヤカによって語られた人間と機獣の戦争、その顛末は、そんな事実があった事を含め、ツバキに大きな衝撃を与えた。

一切の記録が残っていない理由に、世界改変の可能性が浮かんたツバキ。そんな彼女を更に動揺させたのは、〈カグツチ〉の本来の名前が、地球で出来た友人と同じ事だった。〈ヤミヒメ〉。

それが機獣だった頃の〈カグツチ〉の名前だという。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

午前九時。商店や施設、各種業務が本格的に動き出すにはまだ早い。街が賑わい始めるには十分な時間帯のはずだ。だが、中心部はおろか、外縁に至るまで人の気配がまるでない。あるのは異形の群れ。荒廃した街並みに蠢く、機械のような蠍、虫と蜥蜴と軟体動物の合成獣。そして、それらを睥睨するように佇む巨大な魔獣。

東方大陸の首都オオミヤ・シテイは崩壊し、今や異形の巣窟と化していた。

古代の機獣である〈ステインガー〉の幼体。

〈呪詛〉の名で呼ばれる正体不明の敵性体。

創世神話に語られる〈ハメツノマジウ〉を想起させる巨大な機獣。

それらの急な出現によってオオミヤ・シテイは蹂躪された。住民は虐殺され、生き延びた者は脱出し、すでに街として機能していない。夜が明けたにも関わらず、人の営みが始まらないのも仕方がない事だ。

それを異形達が理解しているかは不明だが、少なくとも周囲を警戒しているようには見えない。すでに自分達の脅威となる存在は狩り尽したと、安心しきっているのかもしれない。その動きはどこか緩慢で、日光浴に興じているようにも見える。巨大な機獣に至っては微動だにせず、眠っているようだ。

人間からすれば悍ましい光景だが、異形にとっては楽園に違いない。

故に、その楽園を破壊しようとする存在は、彼等にとっては悪に他ならないだろう。

結局のところ、正義や悪など立場による認識の違いではない。どれだけ正当化しようとも、自分達が生きるために他者を犠牲にするのは罪であり、すべての生命は罪を背負っている。

彼女等もまた――



瓦礫が散乱する大通りに、何発もの光弾が降り注ぐ。警告もなく、反撃する暇も与えず、異形達は業火に包まれながら無慈悲な殺戮者の姿を目に焼き付けた。背中に羽根を生やし、両手に巨大な爪を持ち、尾を靡かせながら頭上を飛んでいく悪魔は、更に光弾を放ち、異形の群れを屠っていく。

別の大通りには一組の鬼神が現れていた。二本の短剣で素早く立ち回る蒼い小鬼と、刃を仕込んだ大型の盾を両手に持った紅い大鬼。付かず離れず、常に一定の距離を維持しながら、次々に異形を斬り捨て、あるいは粉碎していく。

悪魔と鬼神の出現に気付き、駅前の交差点から移動を始めた異形達が、次々と頭部を破裂させながら倒れていく。周囲に動くものはない。見えない敵か。あるいは魔法や呪いの類か。もつとも、彼等がそんな発想を持ち合わせているとは思えないが、一体、また一体と同胞が倒れ、次は自分かもしれない恐怖ならば感じている事だろう。規則的に刈り取られていく命の火——やがて交差点に動くものはいなくなった。

中心部だけでなく、外縁部でも各所で異変が起こっていた。抵抗する者など残っていないはずなのに、異形の数が少しずつ減っていく。命が刈り取られていく。

彼等の楽園が崩壊していく。



半壊の一步手前といった様子の（L. C. ファクトリー）本社、そのすぐ横の搬入スペースでは慌ただしく所員達が行き交っていた。

「所長。最低限ではありませんが、チェック項目は以上で終了です」

アニスがいない今、代わってロゼットの補佐をしてきているシオリ・ユウキが、手元の用紙に手書きでチェックを入れつつ言った。こんな状況でもきちんと白衣を羽織っており、茶色の髪も普段通りアップに纏められているのが彼女らしい。いきなり解いたらどんな反応をするだろうか、ちよつとした悪戯心を抑えつつ、ロゼットは頷き、所員達を勞った。歓声を上げるタイミングだろうが、誰もがほっと胸を撫で下ろし、脱力してへたり込む者もいる。それだけ緊張と疲労が大きかったのだろう。この作業が作戦の要であり、最も大きな不安要素だったのだから無理もない。加えて時間も限られていたのだから尚更だ。

〈プランF〉。

それが本作戦のために用意したロゼットの切り札だった。

通常の〈機獣少女〉の装備では対応出来ない、具体的には大型の〈カタストロ〉が出現した場合の備えとして考案されていた案であり、定期的に内容の更新は行われていたのだが、実戦配備される機会は一度もなかった。

「出来れば、こんな物騒なもの使わずに済ませたかったけどね」

無論、いくら技術者とはいえ、ロゼットもその方が良いと思っっている。

「同感ですが、あえて指摘させていただきます——ニヤけてますよ、所長」

「そういうシオリも、自信作を誰かに見せたくて仕方ないって顔してるよ?」

互いの顔を見合わせて僅かな沈黙を挟むと、妙齢の女性二人は同時に笑みを深めた。傍目には微笑ましい、乙女の花園のような光景として映っているに違いない。

「——盛り上がっているところ申し訳ないのですが」

言葉とは裏腹な凛とした口調と声に、ロゼットとシオリがハツとする。確かに呑気に悦に入っている状況ではない。すでに作戦は始まっているのだ。

オオミヤ・シテイを崩壊に追い込んだ巨大な機獣に続き、それが発射する荷電粒子砲を偏向・増幅する浮遊物体まで出現した事で、ロゼット達は否応なく決戦を挑まざるを得なくなった。上昇する浮遊物体が衛星軌道上に到達すれば、その瞬間に人間の負けとなる。

しかも予想到達時刻は今日の正午。

あまりにも時間がなかった。

「ごめんごめん。緊張感がなかったね……」

「いえいえ。このような状況でその余裕、むしろ感服します」

苦笑を浮かべるロゼットに、〈フランク〉を身に纏った少女は嫌味なく答えた。本心から二人の豪胆ぶりに感心しているようだ。実際には技術者としての達成感が緊張感を上回っていただけなのだ……。

彼女の名前はアエラ・カートライト。十五歳の中学二年生。

〈機獣少女〉の適正は認められたものの、まだ訓練課程を終えておらず、当然何処の事務所にも所属していない。そんな半人前でならない少女に、勝利の鍵は託された。

「そろそろ時間だけど、いけそう?」

「往くも地獄、退くも地獄……ならば往くのみです!」

芝居がかってはいるが、頭部を完全に覆うヘルメットの風防越しに見える晴れ晴れとした表情から、虚勢でない事は充分に伝わってくる。〈機獣少女〉への憧れがあり、与えられた役割を重圧でなく名譽に思っているからこそ取れる態度だろう。並みの精神であれば逃げ出している状況のはずだ。

「所長、アエラさん、第二フェイズ開始まで三十秒を切りました」

腕時計から顔を上げたシオリが告げた。頷き、ロゼットは信号弾を準備した別のスタッフに目配せをすると、再びアエラに視線を戻した。

「アエラ——」

「湿っぽい言葉は不要です。せつかくなら景氣の良い言葉で送り出してください。私はこの初陣で終わるつもりなど毛頭ないのですから」

肝が据わっているというべきか。ハツタリではなく、アエラの言葉はすべて本氣なのだ。

世が世なら、戦場で将となっていたかもしれない。

「……そうだね」

彼女が欲しいのは謝罪や心配ではない。そんなものは重荷を背負わせてしまっている側が罪悪感から逃れるための自己満足でしかない。

「アエラ——ぶちかませ！」

拳を握り、正面に突き出すロゼット。

「承知しました！」

アエラも同じように拳を握り、こつんとロゼットのそれに応じる。風防越しに覗く彼女の満足そうな表情を見るに、これで正解だったようだ。

「アエラ・カートライト——いざ、出陣……ッ!!」

ロゼット達が離れた事を確認したアエラは勇ましく宣言すると、腰の後ろから左右に突き出した主推進装置を作動させ、大きく跳躍。重装備による重さを感じさせない加速性能を以て、戦場へと赴いた。

ロゼット発案の〈B O 作戦〉発動から三十分経過。

『輪』の衛星軌道到達予測時間まで、残り二時間二十分。

第四十話

一点突破

ゼヘナ暦二〇一六年十月二十七日。

オオミヤ・シテイに向かい南下する車両の中で、ツバキは昨日のアヤカ・シユバイツァーとの会話について考えていた。彼女は、ツバキの相棒パートナーであるMBデバイス（カグツチ）が機獣だった頃の搭乗者で、〈カグツチ〉自身も忘れていた本当の名前を教えてくれた。

〈ヤミヒメ〉。

故郷から遠く離れた別の星で出会った、友人であり恩人でもある少女——流遠るとおやみひめと同じ名前。

滞在していたのは八日間だけだが、あの時代の『ニホン』でも珍しい名前だというのは現地にいる間に気付いた。それが偶然であ出会う事などあり得るだろうか。同じ名前だから引き合った——だとすれば運命的だが、それこそ現実的ではない。

（でも、二人に何らかの繋つながりがあるなら……）

必然性があり、出会うべくして出会った。それを運命と呼ぶのなら、ありえない話でもないのかもしれない。そうでなければ、偶然出会った現地の人間に〈機獣少女〉の適正があり、すでに契約者がいた〈カグツチ〉との二重契約を果たせるなど出来過ぎだ。

（……これだと結局、運命で済ませているのと同じか）

考えて答えが出る問題ではないし、言ってしまうえば『名前が同じ』というそれだけの話なのだが、ツバキは妙に気になった。両者が事実上『音信不通』のため、何かの手掛かりになればと思ったのかもしれない。

アヤカに相談してみようかとも考えた。だが、ツバキが口を開きかけた直後、状況が大きく動き始めたため、話を中断せざるを得なくなったのだ。

「——タカチホさん、大丈夫ですか？ 気分でも悪いんじゃないか……？」

自分を気遣う少女の声に、ツバキは顔を上げた。正面の席すわに座るモカ・カワイだ。焦げ茶色のショートヘアにレースのリボンが似合っている。小柄で幼い印象だが、学年はツバキより一つ上の小学六年生だったと記憶している。

「慣れない車なので、少し酔ってしまっただけかもしれません」

心配されるほど思いつめた表情になっていたようだ。理由を説明する訳にもいかないの
で、それっぽい事を言って誤魔化ごまかす。実際、後部座席は左右向かい合っていて、電車のよ
うに横方向に走っているため、慣れていないのは本当である。

「ありがとうございます、心配してくれて」

「そ、そんな……えへへ」

ツバキが礼を言うと、モカは照れくさそうに笑った。素直な性格なのだろう。一つしか
違わないのだから当然かもしれないが、やはり年上という気がしない。

モカの隣に座っているリツ・ミナトとも目が合ったので、『大丈夫です』という意味を込めて会釈えしゃくをすると、『ならいいわ』といった様子で、何も言わず流れる景色に視線を戻した。美人でクールな雰囲気のカナコ・T・シングウジに似ている。ベリーショートだが同じ黒髪、年齢も十六歳でカナコと一つしか違わないはずだ。そこまで離れている訳でもないのに、ツバキからすれば高校生というのは不思議と大人に見える。

(橘たちばなさんは三年生のはずだから十八歳。私と七つ違うのか……)

橘アサトは地球で出会った、もう一人の恩人。優しくしてもらって、少しドキドキしたりもして、もう会う事はないと思っていたのに、ゼヘナで再会した。

(どうしているだろう。カナコさんが連れ出したのだから、身の危険はないと思うけど)

〈ヒナミ総力戦さなみ〉の最中、カナコはサクヤヒメによるものと思しきバイサー一面を付けた姿で戦場を離脱し、作戦が進行していたヒナミ・シテイへ向かっていたトレーラーから強奪に近い形でアサトを連れ出したと聞いている。その後の消息は揃そろって不明。

「……………」

サクヤヒメに捕とらわれ、正確な状態すら判らないやみひめ。MBデバイスとしての機能は生きているが、言葉を発さない〈カグツチ〉。消息不明のカナコとアサト。やみひめと〈カグツチ〉の繋つながりの件も含め、小学生のツバキが抱えるには荷が重すぎる。

「……………ちよっと、本当に大丈夫なの〈難攻不落〉?」

また考え込んでしまったためか、思わぬ相手から声をかけられた。右隣に座っているキリエ・ソウマが、『別に心配とかしてないけど一応、気にかけてあげるわ』といった様子でツバキの方を向いていた。明るい茶色のロングヘア。薄緑色の切れ長の瞳。普段はきつい印象なのだが、視線は微妙に逸そらしており、やや緊張が伝わってくる。

これまでの関係性を思えば無理もない。主にカナコに対してだが、ツバキにも敵意剥むき出しで接してきたため、今更態度いまだらを変える事に抵抗があるのだろう。オオミヤ・シテイが崩壊した日、初めて二人だけで話をした。それからエイミス教の施設に滞在していた五日間で、キリエとはだいぶ普通に話せるようになったと思う。もっとも、相変わらずツバキの事は二つ名で呼ぶが。

「——本人が大丈夫だって言ってるんだから、過ぎた気遣いはむしろ迷惑よ」

ツバキが反応するより早く、窓越しに景色を眺ながめていたリツが言った。視線は外に向けたままで、独り言とも取れるが、それはないだろう。

「……………今の、私に言ったのかしら?」

「別に。たまたま耳に入ったから、自分の意見を言っただけよ」

……………。

後部座席が緊張感に包まれる。

ツバキはその場に居合わせていないため又聞きなのだが、ヘナミ総力戦でリツとモカはキリエの攻撃を受け、死にかけているのだ。モカもサクヤヒメの一面の影響下にあった経験があり、この場の全員がおおまかに事情は把握している。だが、エイミス教の施設で過ごしている間も、当事者のみで顔を合わせる機会はなく、きちんとした和解は出来ていない。状況が切迫しているからといって、このメンバーだけの空間で、柵上げ出来る程度の遺恨ではないだろう。

「感じ悪いわね！ 言いたい事ははっきり言いなさいよ……!?!」

「大声を出さないでくれる？ 誰かにやられた傷に響くわ」

声を荒げるキリエとは対照的に、リツは淡々と応じ、わざとらしく腹部に右手を添える。

たしかキリエが投擲した馬上槍タイプのMBデバイス（オーデイン）が突き刺さった箇所だったはず。

「う……」

さすがに罪悪感でたじろぐキリエ。ここで『知った事じゃないわ!』とはさすがに言えないのが彼女らしい。人格に問題はあるが、あくまで『困ったちゃん』で、本当に嫌な人間という訳ではないのだ。サクヤヒメから解放された影響なのか、カナコがいなかったためなのかは判らないが、現在のキリエはだいぶ丸くなった気さえする。

「だ、大丈夫ですよ、ソウマさん！ もう怪我は傷痕が残らないくらい綺麗に治ってるんですから……っ」

ずんと沈み込んだキリエを気の毒に思ったモカが、慌ててフォローする。

「そうね。でも、身体の傷は癒えても、心の傷は簡単には消えないわ」

「もうっ、リツ先輩は意地悪です！ 確かに私もソウマさんを見ると、ちよっただけあの時の事を思い出して、身体が強張ったりしますけど……」

「モカ、それはPTSD——心的外傷後ストレス障害という心の病よ」

「ええ……っ!?!」

リツとモカのやり取りが進むにつれ、キリエの表情が目に見えて暗くなっていき、すでに涙目になってすらいる。恐らく罪悪感でいっぱいなのだろう。気が強いわりに打たれ弱い性格なのだ。

助け船を出すべきだが、どう仲介すべきかが判らない。これからの事を思えば一時的にでも和解、あるいは問題を柵上げしてしまっべきだが、今を逃せば和解する機会永遠に失われてしまう可能性がある。

ツバキ達に明日はないかもしれないのだから。

ツバキ達が乗る大型車両が向かっているのはオオミヤ・シテイ。其処で今、街を崩壊に導いた巨大な機獣への攻撃作戦が行われている。

「……………」

話は昨夜に遡る。ツバキがアヤカに、やみひめと（カグツチ）の繋がりについて相談しようとした時、かなり慌てた様子のキリエが救護室に駆け込んできた。既視感を覚えつつ、彼女に従い移動すると、部屋には共に避難してきた（機獣少女）が揃っており、あの動画が再生された。それはネットワーク上の動画投稿サイトに掲載された動画で、異常な勢いで拡散されていたようだ。

動画の投稿者はロゼット・コダール。

内容は地下から出現した『輪』の存在と、その脅威を伝えるというもの。明日の正午には最悪の状況となる可能性が極めて高いため、その前に機獣へ攻撃を仕掛けるという。あとは具体的な作戦案や開始時間、混乱を避けるためのコードネームなどが含まれていた。（ステインガー）は成体も幼体も特殊な磁場を発生しているらしく、電波障害を起こし通信が不可能なため、こうして世界中にメッセージを送る事にしたのだろう。然るべき機関等にメールも送っているだろうが、この非常時では読まれない、あるいは相手にされない可能性すらある。だが、ロゼットなら知名度も信頼度も高いため、本人が動画で訴えればこのように一瞬で拡散されるのも道理だ。現にツバキ達には届いたのだから。

そして現在に至る。

MBドライバー・アソシエーション東方大陸支部に常駐し、共にエイミス教の教会施設まで行動を共にした（機獣少女）六人は来ていない。理由は様々で、怪我や力不足、避難民の護衛が必要だと言う者もいた。それを責めるつもりはない。どうせ死ぬなら戦って死ぬ方がマシとも思わない。せつかく拾った命だ、勝たなければ世界が終わるとしても、ここで自分が死ねば勝つても意味がない。

（機獣少女）は自己犠牲上等のヒーローではない、戦う力があるだけの普通の人間なのだから。

「——そのくらいにしてあげたら、りっちゃん？ きりりん、泣いちゃってるよ？」

答えが出せないでいると、仲介者はツバキの左隣から現れた——アヤカだ。ポニーテールにしたセミロングの黒髪が、車両の振動に合わせ小さく揺れている。

「え、本当に？ ……っていうか、『りっちゃん』って言った？」

「泣いてないわよ！ あと『きりりん』ってやめてくれる!？」

車内の微妙に気まずい空気が変わった。アヤカは変わらず自然体といった調子で続ける。「りっちゃんと言うほどもう根に持っていないよね。ただ、けじめとして謝ってほしいだけ

」

「……ええ、まあ。いや、だからその呼び方——」

「きりりんだって本当は謝りたいんじゃない？ 悪かったなって、ちゃんと思ってるのに
恥ずかしくて謝れないとか……かーわいい！ ぎゅってしてもいいかなっ!？」

「勝手な事を……ちよつ、近寄らないで！」

アヤカに照準固定されたキリエが、間に座っているツバキを防壁にして悲鳴を上げた。

「……あの、私を盾にしないでください」

「あんた 《難攻不落》 でしょ！」

キリエからは理不尽な事を言われ、アヤカからは『この際、ツバキでもよし!』とばかりに抱きつかれ、とんだとぼっちりだ。

「そ、そうですよ！ この際だから作戦前に仲直りしちゃいましょう！ ほら、りつちゃん先輩、きりりんさん、握手！」

その場の空気と勢いに任せたらしく、モカはその性格からすれば思い切った行動に出た。身を乗り出し、リツとキリエの手を取って強引に握手をさせようとする。

「……別にいいけど」

「ま、まあそういう事なら仕方ないわね……ごめんなさい」

ひどく小声だったが、キリエの浮かべている表情で溜飲りゅつゐんは下がったらしく、リツは「もういいわ」と視線は合わせず言った。キリエから素直に謝罪の言葉が出るとは予想していなかったのだろう。

「それはそうと、『りつちゃん先輩』って……」

「可愛くないですか!？」

「……あんた、次『きりりん』って言ったら殺すわよ!!」

「可愛くないですか……」

「まあ、モカがそう呼びたいなら私はいいいけど」

「私は御免よ!？」

これで綺麗さっぱり水に流せた訳ではないだろう。だが、少なくともしこりを残したまま戦いに臨むよりは余程いい。

「すごいですね、アヤカさん」

「惚れ直しちゃった?」

「それだとすでに私がアヤカさんに惚れている事になるんですが……」

「目と目が合った瞬間に、もう始まっていたのね。フォーリンラブだわ」

本気なのか冗談なのか、まるで凶れない。だが、その飄々とした態度がツバキは

嫌いではなかった。

「喧嘩けんかなんて誰でもするもんだけど、女の子がつらそうにしてたら、なんとかしてあげたいじゃない？ そう思っただけ」

誇るでも謙遜するでもなく、やはり自然体な表情と口調でアヤカは言った。彼女にとつて、先の行為はごく当たり前の事なのだろう。生まれた時代が違うとはいえ、彼女はまた十五歳で、しかしツバキからすれば大人に見える高校生二人よりも、より達観して見えた。それがアヤカにとつて幸せな事ではなかったとしても。

「そろそろね」

アヤカの呟つぶやきに、ツバキも窓の外に視線を移す。オオミヤ・シテイがぼんやりとだが見えてきた。



瓦礫がれきの散乱した道路を走り、腰部の主推進装置メインストラスタを使って十メートルほど跳躍ジャンプ。スカートのようなサイドアーマーに内蔵された推進装置ストラスタによる逆噴射で位置ポジションを微調整し、地上に向けて右肩の散弾迫撃砲を放つ。白い糸のような煙を引き、計三十発もの接触信管式炸裂弾が〈ブレケース〉の群れに降り注ぐ。

目標への着弾と爆散を視界の端はしで確認し、着地と同時に方向転換。主推進装置による加速で一気に距離を稼ぎ、左肩のバトルカノン砲を用意。折りたたまれていた重火砲が展開し、撃ち出された大口径弾が若干の放物線を描きながら飛ぶ。反動は大きい、その分、長い射程と強力な貫通力を持ち、直撃した工場は倒壊し、潜んでいた〈ステインガー〉の幼体群を押し潰おしていく。

〈BO作戦〉の要かなめ——〈プランF〉の実行により開発された〈機獣少女システム〉を纏まとい、アエラ・カートライトは戦場を支配していた。

通常のMBジャケットとは一線を画した、〈FA：Gエンタテインメント〉の兵器然としたコンセプトを更に突き詰めた装備は、ほぼロボットアニメのそれと大差ない。ギリギリまで大型化された馬上槍ランスと盾シールドも目を引くが、特筆すべき点は他にもある。

まずは火薬を使った飛び道具の存在。機力を弾丸として撃ち出すのは威力が段違いだ。もう一つ。これは視覚的な話だが、装着者の顔を完全に覆おおってしまうヘルメットが挙げられる。東方大陸における〈機獣少女〉とは戦うアイドルであり、その顔が半透明の風防シールドで隠れてしまうのだから。

〈フェンサー〉。

それがこのMBデバイスに与えられた名前である。起動時の巨大な馬上槍を構える姿がフェンシングの剣士に似ているのが由来らしい

「――」

慌ただしく走り、加速し、跳躍し、時に推進装置による強制的な方向転換と姿勢制御。機力によって身体能力が強化されていなければ不可能な機動であり、アエラほどの適正がなければ三半規管が狂ってしまう。あまりに使用者を限定してしまうという意味では、「フェンサー」は欠陥機と評されるだろう。誰でも使えて一定の成果を上げられてこそ、道具は優秀と言えるのだから。

（それも評価されてこそその話……）

この局面を乗り切れなければ、評価される事すらないのだ。アエラは「フェンサー」が気に入った。確かに暴れ馬だし、現状では酷評されるかもしれない。だが、機会さえあれば評価などいくらでも変えていける。

（そのためにも――）

両肩の武装と比べれば貧弱とも呼べるサブマシンガンで敵の群れを牽制し、その隙に巨大な馬上槍――「ブラストホールスピアEXII」を右腕に装着

「押し通らせていただきますでしょうか……ッ!!」

ヘルメットの風防越しに敵群を見据え、アエラは呐喊した。



アエラの縦横無尽の戦いぶりを、バニラ・イカルガは照準器越しに見守っていた。

合図の信号弾を確認し、駅前の交差点を狩り場としていたバニラはリーダーでアエラの位置を補足し、援護するため適した場所に移動していたのだ。

「まったく……」

小さく嘆息しつつ、引鉄を引く。照準器内で、ほぼ同時に「ステインガー」の幼体の平たい頭部が弾けた。次は隣の「ブレイクス」の頭部が弾け、一体、また一体と敵が屍へと変わっていく。

初陣で、しかもぶっつけ本番と言っているいい装備としては、アエラはかなり良くやっている。だが、当然ながら完璧とは程遠い。視野が狭いし、位置取りも甘い。バニラが死角にいる敵を狙撃で潰さねば、とうに群がられて終わっていただろう。

「ふう――」

息を吐き、空になった弾倉を交換する。残りには三分の二といったところか。

現在、バニラは〈ヒナミ総力戦〉で用いた高機動用の〈ベリル・ウイング・ユニット〉と近接戦闘用の〈ベリル・ランス〉を外し、〈L・C・ファクトリー〉にて改修されたスナイパー装備を使用している。右肩には折り畳み式の大型電磁狙撃銃〈サンダー・ボルト〉を懸架し、左肩には広範囲レーザー・ユニットを装備。これらには有線ケーブルで頭部の複合ユニットと繋がっており、同期させる事で超長距離からの精密狙撃を可能とする。

低い位置で結んだ長いツインテールを背中に払い、アエラの動きに合わせて狙撃を再開する。改修された〈サンダー・ボルト〉は徹甲弾を使用しており、機力を消費せずに済むのがあるがたい。なぜこんな前時代の遺物にして、無用の長物を大量に貯蔵していたのかは謎だが。

「……………」

機械のごとく狙撃を続けては、弾倉を交換する。

狙撃手は孤独だ。安全な場所からこそこそ撃つなんて楽な仕事——とんでもない。狙撃手は常に自分の位置が敵に知られる恐怖と戦っている。狙撃に適した場所は限られているため、存在に気付かれれば見つかるのは時間の問題なのだ。連中にそんな知恵があるとは思えないが、それも絶対ではないのだから。

「……………ライカ——」

事務所の同僚であり友人でもあるライカ・ユズキ。イベント試合などでは今のよう、バニラが彼女の背中を護る事が多かった。だが、前衛のライカが敵を後方に漏らさないからこそ、バニラは安心して援護に徹する事が出来ていたように思う。向こうからは見えていないだろうに、アシストすると照準器越しに見ていると踏んで、バニラに向かってサムスアッパ親指立てする事もあった。戦闘中にも関わらずだ。

アエラはバニラの援護に気付いていないだろう。伝えていないし、自分の事で精一杯のはずだから仕方がない。別に感謝されたい訳でもないし、アエラは従妹でもある。可愛い妹分であり後輩の世話を焼くのは当然だ。

「——え……?」

無意識にライカとアエラを比較してしまった自分に嫌悪感を覚えた時、空中で出鱈目な姿勢制御を行っていたアエラと目が合った。

『助太刀、痛み入ります、バニラ姉様』

距離があり過ぎて見えないはずのバニラに向かって、今日が初陣の従妹はそう言った。

当然、声は聞こえないため口パクだが、内容は間違いないと思う。

アエラはバニラの援護フオローに気付いていたのだ。しかも狙撃された敵の位置から、おおまかにだがバニラの位置を割り出した。

「まったく……世話が焼けますね」

将来が未恐ろしい、可愛い妹分であり後輩に改めて嘆息たんそくし、バニラは狙撃手スナイパーの仕事を続けた。



〈フエンサー〉を装備したアエラが街の中心部に向かい進んでいる頃、アイナ・ボーグマンとルイゼ・ルンシュテッドは一帯の敵を殲滅せんめつし小休止を取っていた。

「ふむ。思いのほか戦えるものだな」

「……そうですわね」

小柄な蒼い髪の少女・アイナが感心したように言うと、長身で紅い髪の少女・ルイゼが苦笑ぎみ気味に答えた。どちらも鬼神の如き戦いぶりで敵を蹴散けちらしていたというのに、疲労している様子はまるで感じられない。さすがは〈獅子王シンオウ〉と〈竜帝リュウテイ〉、『二つ名』持ちにして、非常時の独自裁量を認められた〈機獣少女〉といったところか。

〈ヒナミ総力戦〉において、互いにMBデバイスのコアの片割れを失った二人だったが、それによる戦力低下は思わぬ方法で解決された。MBジャケット展開時に武器が左右一対となり、それぞれに納められたMBコアが共鳴する事で出力を増幅する一対仕様デュアルは、当然、片方が失われれば出力が低下してしまう。そこでロゼットは、MBデバイスの仕様が同じ点に着目し、アイナの〈ビエル〉とルイゼの〈ジービー〉が共鳴するよう手を加えたのだ。結果は成功し、有効範囲は五メートルと狭いが、共鳴による出力上昇値は三割増しとなった。二人はあまり離れられないため、数としては実質一人に近いが、戦力としては通常の〈機獣少女〉十人分に相当する。

「どうした？」

不意に手を握られたアイナが疑問を呈ていする。

「いえ。離れてしまうといけませんので」

ルイゼは冗談めかして言ったが、本心でもあった。アイナは気を付けているつもりなのだろうが、戦闘中に五メートル以内の距離を維持してられるのは、ルイゼが動きを合わせているからだ。結果として、ルイゼがアイナをアシストする形になっていた。ルイゼにしてみれば不満はないのだが、冷静に見えて突出しがちな友人が心配で、思わず行動に出

てしまったのだった。

「これで戦闘は、さすがに無理があるだろう」

「ですわね。では、せめて小休止が終わるまでも」

アイナとルイゼのMBデバイスには、機獣だった頃の因縁がある。それを契約者である二人は、具体的な映像として見ており、その結末を知っている。だから、どうしても自分達の未来を重ねてしまう。決死の覚悟で臨んだヘナミ総力戦は生き延びたが、相棒の〈ビエル〉と〈ジュービー〉は半身を失い、次は自分達の番なのではないかと思ってしまうのだ。

「……仕方ない奴だ」

ルイゼの心中を察したのか、アイナは繋いだ手を握り直し、背中合わせの格好で言った。身長差があるため、主に背中でアイナを感じる。

「お気遣いに感謝を」

小さいが、強く気高く、優しい友人に向かって、ルイゼは背中越しに答えた。

〈BO作戦〉が進むオオミヤ・シテイ。

その片隅で、一時だけ穏やかな時間が流れた。



小休止を行っているらしいアイナとルイゼの頭上を、通過していく飛行物体があった。鳥にしては大きく、航空機にしては小さすぎる、人の姿に機械の羽根を持つ飛翔体——〈機獣少女〉だ。彼女は次に、〈フェンサー〉を纏ったアエラが支配する戦場を確認し、行きがけの駄賃としてプラズマ光弾を地上に降らせる。アエラを指していた敵の一群が壊滅するのを見届けると、次の戦場へと移動する。

地球から来た〈機獣少女〉であるクラウ・P・ブランド。

白のアクセントが映える黒いMBジャケット。背中には機械の羽根、腕には巨大な爪、腰部には多関節の尻尾があり、全体的にエッジの効いた攻撃的なシルエットを形成している。装着者がクールな印象の美少女であるため、味方には女神の如き神々しさを与えるだろうが、敵の目には破壊の限りを尽くす悪魔として映る事だろう。

「……………」

ロゼット命名の〈ラインハイト〉を纏い、戦場と化したオオミヤ・シテイの空を舞う。東方大陸は人種や街並みが、クラウの生まれ育った日本と酷似しているため、より眼下の光景に胸が痛む。半世紀以上前に日本も戦争をしていた。今でも戦争や紛争をしている国

や地域はある。だがそれは知っているだけの、所詮は知識に過ぎないのだと実感した。
「いた……っ」

街の中心部の戦況を確認したクラウが外縁部の上空に到達すると、数人でチームを組んで戦う〈機獣少女〉の姿が見えた。通信が来ず、誰が生き残っているのかすら不明な状況で、なんとか探し出し、分の悪い賭けに乗ってくれた者達である。
人数は五。対する敵は残り八。

これまでの戦闘で、単体の〈ブレイクス〉と〈ステインガー〉の幼体に対しては、一般的な実力の〈機獣少女〉が二人で挑めば安全に倒せるというデータが出ている。数字だけで計れば確実に犠牲者が出るだろう。だが、〈機獣少女〉の一人が何かを操作すると、彼女の全身がぼんやりと紅く輝いた。他の四人がそれぞれ一体ずつ敵を押さえ込んでいる間に、彼女は熟練の〈機獣少女〉並みの動きと力で次々に敵を屠り、チームが二対一に持ち込めるようになる。通常の状態へと戻り、仲間と残敵を殲滅した。同じような事を繰り返し、彼女等はこの戦線を維持してきたのだろう。

「あれが〈D・I・R・S〉……」

〈ディスプレイザブル・イミテーション・レイジ・システム〉——通称〈D・I・R・S〉は、ロゼットがライカのMBジャケットに搭載されている〈レイジ・システム〉を解析し、使い捨ての簡易版として急遽開発した、〈BO作戦〉の切り札の一つである。本家ほど出力は上昇せず、戦闘中のエネルギー再充填こそ不可能だが、任意のタイミングでシステムを解除出来るため、総合的な使い勝手は良くなっているらしい。

「おつかれさまです。全責、無事ですね」

「あ、おつかれさまです。おかげさまで誰も怪我をせずに済んでいます」

クラウが降下し、先の五人に話しかけると、〈D・I・R・S〉を使用した少女が代表して答えた。

「いやあ、隊長殿の指揮が的確でしたからね！」

「そうだね。さすが隊長！」

「〈D・I・R・S〉にも救われました」

「私はもう疲れた……」

急造チームではあるが、関係は良好らしい。一人かなりダルそうだが、本気でやる気がなければこの作戦には参加していないはずだ。

「周辺に敵影はなかったので、補給が必要であれば今なら戻れますが」

「マジか。よし、すぐ帰ろう。私は眠——」

「はいはい。もう少しがんばろうね」

「そうですね。ここが正念場でしょうし」

「自分も平気です、隊長殿！」

クラウの提案にダウンナー系の少女がテンションを上げたが、やんわりと他のメンバーに却下されていた。

「えーっと……」

「大丈夫です。全員、まだ〈D・I・R・S〉の使用時間は二分以上残っているので、この場で警戒を続けます」

戸惑うクラウに、隊長と呼ばれていた少女が、やはり代表してチームの意思を表明した。

物腰は穏やかだが、不思議と迫力があるところが、同年代と思われるメンバーから隊長と慕われる理由なのかもしれない。

「判りました。では、よろしくお願いします」

「了解です！」

クラウが会釈すると、チームのメンバー全員がビシッと——一人はやはりダルそうに

——敬礼のポーズで見送った。



周囲の敵は掃討したものの、〈フェンサー〉の最終調整を終えた所員達は、安全のためへし、

C・ファクトリーへの地下施設に戻っていた。

通信が使えないため、名ばかりの作戦指揮所にて、ロゼットは何も出来ない無力感に苛まれていた。年端もいかない少女達が命がけで戦っているのに、ただ作戦の成功を祈る事しか出来ないのだから無理もない。

人にはそれぞれ役割がある。彼女は自分に出来る限りの手を尽くし、少女達を送り出した。そして作戦が失敗すれば一蓮托生。

だが、それでも——

「情けないなあ……」

大人として。人として。

「そんな事を言わないでください、所長」

アニスに代わってロゼットの補佐をしてきているシオリ・ユウキが、やれやれといった口調で言った。

「少なくとも現状で〈BO作戦〉は最善の策です。この作戦に参加した全員が、そう思っているはずですよ」

ロゼットが発案した〈BO作戦〉。それは『一点突破』を意味する『ブレイクスルー・ワ
ンポイント』の頭文字から取られた、極めてシンプルな作戦名だった。内容は攻撃目標で
ある巨大な機獣——混乱を避けるため、創世神話に登場する『ハメツノマジユウ』にちな
み〈破滅〉と呼称する事になった——に対し、弱点と思われる首の付け根を一点に狙うと
いうものだ。

ファースト・フェイズ
第一段階は同時多発的な攻撃によって敵戦力を分散・足止めし、〈フェンサー〉の
最終調整のための時間を稼ぐ。この際、可能な限り敵戦力を減らせるのが望ましい。

セカンド・フェイズ
第二段階は巨大な機獣——〈ルイン〉を指し街の中心部に突入。外縁部を担当し
ているチームは引き続き敵戦力の足止めに徹し、突入チームは〈フェンサー〉を使用する
アエラの援護。

ファイナル・フェイズ
最終段階は〈ルイン〉への直接攻撃。対大型〈カタストロ〉用に考案された〈ブラ
ストホールスピアEXII〉で、首の付け根にある送風機を破壊する。

〈フェンサー〉の存在ありきの、まさに一点突破。しかも、状況が似通っているため当然
ではあるが、ほぼ〈ヒナミ総力戦〉と同じ作戦内容。あくまで技術畑の人間とはいえ、発
案者としてロゼットは力不足を感じざるを得ない。シオリが言ったように、現状において
最善策ではあるのだが、この作戦に命を預ける少女達の事を思うと納得など出来ない。

自社サーバーを通じて掲載した動画による呼びかけ。〈フェンサー〉の投入。バニラ
のスナイパー装備。〈D・I・R・S〉による全体的な戦力の底上げ。切り札はいくつも切
った。

「ありがとう」

時に辛辣だが、こうして気遣ってもくれるシオリに、苦笑を浮かべつつも感謝の言葉
を送る。

「でも、まだ何か一枚でも鬼札があればって思っちゃうんだよね……」
仕方がないとはいえ、やはり出たとこ勝負な感が強い。せめて何か、状況をひっくり返
せるような要素が欲しい。動画による呼びかけは、その意味が強い。増援が欲しいとい
よりは、いつそ決起に便乗して〈ルイン〉を別の手段でも何でも構わないので倒してほ
しいのだ。

「そう都合良くは——」

ボタンと勢いよく開かれたドアの音。駆け込んできたのは高校生くらいの少女で、全力
疾走してきたかのように俯き気味に肩で息をしている。

「はあはあ……。よう、ロゼット」

白いショートヘアで、淡藤色の毛先が外にはねているため、活発というかわイルドな

印象を受ける。右手首には紫色の宝石が詰め込まれた白い腕輪フレスレットがあり、その待機モードのMBデバイスをロゼットは知っている。

「ビヤクエン」の整備、終わってる？」

挨拶もほどほどに、駆け付けたばかりの〈機獣少女〉はそう言った。



〈ハメツノマジユウ〉が眠っていた地下施設。

薄暗い無機質な空間で、サクヤヒメは安楽椅子アームチェアに身を沈め、各所に散った幼体の視覚を通して地上の様子を視ていた。

「この期ごに及んで、まだ足掻くか——」

いや、むしろ最期の瞬間まで足掻いてこそその命だろう。藻掻もがき、足掻く事こそ、生命の本質。すべての生き物がそうであるように、人間もそれは変わらないという事か。

上昇を続けている〈ハイロウ〉の目標高度到達まで、残り二時間と少し。〈ハメツノマジユウ〉を動かしてもいいが、そうすると二時間後に荷電粒子砲を撃つのは不可能となる。急ぐ理由もないため、先に目障めまわりな連中を薙なぎ払ってもいいが、それはそれで癩しやぶに障る。一矢報いつしむいた——などと思われてはたまらない。

サクヤヒメは億劫おっくうそうに立ち上がると、流し目を送るように床に視線を走らせた。すると薄暗い空間に『淀よどみ』が三つ蟠わだかまり、それぞれ大きく広がっていく。やがてそれらは霧散し、二つの巨体と五つの人型が現れていた。二体は前傾姿勢に巨大な頭部と長い尻尾を備えた、細部は異なるが同種のシルエットを持つ大型の機獣。五人は以前呼よび出した

〈機獣少女〉である。

「ふん。せいぜい抗あがってみせよ」

地上を指す二体と五人を見送りながら、サクヤヒメは然さして面白くもなさそうに独りごちた。



午前十時五分。

〈BO作戦〉発動よりすでに一時間が経過した頃、車両のトラブルで出遅れたツバキ達がオオミヤ・シテイに突入すると、情報にない機獣と出会であわした。

前傾姿勢で、長い尾を地面と水平に保ち、発達した後脚に比べ前脚は退化しきれず残っ

てしまったかのように小さい。最も特徴的なのは巨大な頭部で、鋭利な牙が並ぶ大きな顎に噛み砕かれればひとたまりもない。もつとも、人間相手であれば丸呑みだろうが。高さは十メートルほどで、(ルイン)——攻撃目標の巨大な機獣——の半分もないが、全長は約三十メートルあるため、人間からすれば充分に巨大だ。

(地球の図鑑で見た、ティラノサウルスに似てる……)

太古の地球を支配していた恐竜。その中でも最強と呼ばれる大型肉食獣。

(ルイン)もそうだけど、人間はこんなものを兵器として使っていたなんて……)

かつて人間は機獣に搭乗し、戦争をしていた。それが当たり前の時代があった事が、ツバキには信じ難かった。

同時に、自分達が《機獣少女システム》として使っている機獣の力が、ほんのちつぽけなものである事も理解した。

「はああああああああああああああああああああああああああああ——ッ!!」

ドレスに甲冑を組み合わせた姫騎士風のMBジャケットを纏ったキリエが、件のテイラノ型に呐喊した。爆発的な加速で自身を弾丸とし、馬上槍を構えての突撃は彼女の十八番であり、一撃の威力だけなら《機獣少女》の中で最大級と言える。壁が厚いコンクリートであれば粉碎し、金属であつても貫通は免れない。

しかし——

「——つく」

両側面を護る盾のような装甲に阻まれ、キリエは後退。直後にティラノ型の尾が、彼女のいた空間をフルスイングの勢いで通過した。

リツとモカも連携で攻撃を繰り返し、アヤカも様々な銃器を駆使して彼女等の援護に徹している——だが正直、まるで勝負になっていない。ティラノ型にしてみれば、鬱陶しいから追い払おうとしている程度のものだろう。

アヤカの反対側に回り込み、ツバキは牽制の三点射で左目を撃つ。さすがに目は急所なのか、やや戸惑った隙に懐へ潜り込み首を斬りつけるが、ダメージは与えられなかった。

ちなみに《カグツチ》のMBデバイスとしての機能は健在で、《フラスター・フォーム》も自身の機力の消耗なしで維持出来ている。経路を通じて機力が送られてくるという事は、やみひめもまた健在なはず。

「これはさすがに想定外ね」

ティラノ型の機獣から距離を取ったツバキの横に、アヤカが並ぶ。以前に見たのと同じ修道服のようなMBジャケットを纏い、今は両手持ちの回転式多銃身機関銃を携行してい

る。エイミス教のシスターから預かったMBデバイスで、名前は〈イバラヒメ〉らしい。なぜ、そんなものが教会にあったのかも疑問だし、それをアヤカが起動させられるのも謎だが、今は気にしてられない。テイラノ型を突破しない事には先に進めないし、ヘルイン〈と戦う事を思えば、ここで倒して後顧の憂いは取り除いておきたいが、それも叶わない。い。

「機獣少女」五人で一体の機獣に及ばないなんて……」

遠目に見ただけで、ツバキはまだ〈ルイン〉と相対していない。テイラノ型の数倍は大きい相手に、〈BO作戦〉は通用するのか……。

「——ツバキはさ、王子様って信じてるタイプ？」

「……………え？」

唐突なアヤカの問いに、ツバキは質問の意図が理解出来ず、間の抜けた声を発してしまった。

「白馬に乗ってこなきや嫌とか、王冠とカボチャパンツ——はさすがにないか。イケメンで金持ちは必須条件？」

「あの、いったい何を……」

絶望的な状況からの逃避——ではないだろう。アヤカに正気を失っている様子はない。

むしろ、隣に並んだ直後の真剣さが消え、普段の様子に戻っている。

「タカチホさん！」

モカの声にハツとする。並走するリツとキリエも此方に向かつており、ツバキとアヤカの背後を指している。テイラノ型に追撃する様子はなく、何かを警戒しているように感じられたが、その理由はすぐに判明した。

それは聞いた事のない音を立てて現れ、ツバキ達の頭上を飛び越え、テイラノ型に飛びかかった。

「黒い狼……あれは、機獣……？」

ツバキ達の前に現れたのはアヤカの言った白馬ではなく、機獣らしき外見の黒い狼で。

「ああっ、あんた……!？」

「——」

タイミングから考えて、今の狼型の機獣から飛び降りてきたのだろう。ツバキ達の前に現れ、キリエに素っ頓狂な声を上げさせたのは王子様でなく、消息不明となっていたカナコだった。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第四十話をお届け致します。

なかなか思い通りには書けないもので、今回はちょっと難産でした。集中力が続かない。それでも完成しました。しかも今回は、ほぼ想定した通りの内容。こんな事って、あるんだなあ……。

個人的にはオオミヤ・シテイに向かう車両内のシーンが気に入ってます。『きりりん』と『りっちゃん』あとモカは、登場時まさかこんなキャラになるとは思っていませんでした。良きところで謝辞を。

まずは今回もチェックをしていただいている紙白さんに感謝を。初登場のアエラさん(元ネタはメガミデバイス)、バニラちゃんのスナイパー装備(元ネタはFAガール)、(D・I・R・S)(元ネタはライガーゼロ・オーガのシステム)と、新旧の作品や設定を使わせていただきました。これらはサイト内の『展示スペース』に掲載されているので、小説と併せてご覧ください。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

着実に終わりの時が近付いています。あと何話かまだ判りませんが、きちんと書くこと、すぐには終わらない予感もあって……最後までお付き合いいただけると幸いです。

2019 / 11 / 29 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女イカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る